

マウロ・イウラート、伊藤 ルミ

デュオ・リサイタル

解説 宇野文夫

本日は、ヴァイオリンとピアノによるデュオ・リサイタルです。御出演は、イタリア出身で、オーストリアを経て現在日本でも活躍中のヴァイオリニスト、マウロ・イウラートさんと、長く神戸で活動されているピアニスト、伊藤ルミさんです。伊藤さんは、過去何度かグリーンフェスティバルに出演されています。

ヴァイオリンとピアノのデュオは、クラシック音楽室内楽の王道というべきもので、バロックから現代に至るまで、エンタテインメント性に富むものから芸術性の高いものまで、多数の名曲が残されています。尤もバロックの時代は、鍵盤楽器はピアノではなくチェンバロでありました。

本日前半は、イウラートさんのお国もの、ブニャーニ、コレルリ、レスピーギ、モンティといった今昔のイタリアの小品を演奏していただきます。解り易く、楽しく、静かに、激しく、華やかにと、ヴァイオリンの多彩で直截な魅力を満喫できる作品ばかりです。

後半はドイツ・ロマン派の音楽で、伊藤さんのソロでハンガリーのリストの作品と、デュオによるブラームスのソナタ第3番です。ロマン主義における表現領域の拡大をピアノ音楽で最大限に実現したリストと、質実な円熟の極みにあるブラームスのデュオ・ソナタが演奏されます。

ヴァイオリンとピアノによって描き出される、濃密で表情豊かなイタリア音楽と、重厚で構築的なドイツ音楽の魅力を、たっぷりとお聴きください。

尚、本公演は、最初 2019 年秋に予定していたものが台風の接近によって中止、次いで本年春に予定してコロナ禍にて再度中止されていたものです。本日の上演にあたり、お待ちいただきました皆様、重なる延期にも関わらずご出演いただきますマウロ・イウラートさん、伊藤ルミさんに感謝いたします。

演奏者について

マウロ・イウラート (Mauro Iurato) ヴァイオリン

1977年イタリア、トリノ市生まれ。4才よりピアノを初め、9才よりヴァイオリンを習う。トリノのジュゼッペ・ヴェルディ国立音楽院を経て、1998年6月にウィーン国立音楽大学に入学、ストレーザ、トルトーナ、ピエツァ、ヴィットリオ、ヴェネトなど数々の国立及び国際コンクールで優勝を果たした。

活動の場を、オーストリア、イタリア、ヨーロッパ全土、日本、カナダ、アメリカへと広げ、独奏者としてザグレブのオーケストラや国立モルドヴァ管弦楽団と共演、更に韓国室内管弦楽団のメンバーとしても演奏を行う。室内楽では、1998年よりイタリア人ピアノ奏者ジュゼッペ・マリオッティ氏とのデュオを始め、日本、イタリア、オーストリアなどで演奏会を行った。1999年からは、アンサンブル・サリエリ・ウィーン的首席ヴァイオリン奏者を務め、2002年にはウィーン音楽演劇大学とトリノ市にある「ラ・ヌオヴァ・アルカ」音楽協会と共に WTV (ウィーン・トゥリン・ヴィルトゥオーゾ) 国際室内楽団を結成した。

2003年4月から2009年3月まで、ウィーン国立音楽大学と徳島文理大学音楽学部との協力提携プロジェクトにより、徳島文理大学音楽学部のヴァイオリン科、客員准教授として着任。更に、イタリア及び日本にて定期的にマスタークラスを教えている。

2006年よりアンサンブル神戸のコンサート・マスターとなり、2007年より大阪フィルハーモニー交響楽団でもゲスト・コンサート・マスターとして共演を重ねている。その他、東京交響楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢にもコンサート・マスターとしてゲスト出演している。

使用ヴァイオリンは、本人が所有する1690年ジョッフレード・カッパ作の「コッラ・デッラ・キエーザ」、弓はG・ルッキ特別製作のものを使用している。

フランツ・リスト (Franz Liszt 1811-1886)

「ダンテを読んで〜ソナタ風幻想曲」(「巡礼の年 第2年イタリア」第7曲)

“Après une lecture du Dante - Fantasia quasi Sonata”

(“Années de Pèlerinage” 2e Année-7)

後期ロマン派の時代は、音楽の、正確には音や音響自体の表現の可能性が拡大されていった時代です。演奏技術の向上、楽器の発達による大きな音量などによって、それらを駆使した派手な演奏が行われるようになりました。演奏会場が広くなり、その場にいる今までよりも多くの人々に音楽を聴かせようとした故とも考えられます。ワーグナーのオペラがその中心的存在でしたが、リストは同様の効果をピアノ独奏で実現しようとしていました。その為、おびただしい数の音符を五線紙に書きつけています。

1837年から39年まで、リストは恋人のマリー・ダゲー伯爵夫人と共にイタリアに滞在し、当地の文物や文学に影響を受けながら多数の作品を作曲しています。「巡礼の年 第2年イタリア」はその際に生まれたもので、本日演奏の「ダンテを読んで〜ソナタ風幻想曲」は、表題通り『神曲』で知られる作家ダンテのその作品に因んだ音楽です。

二短調の調性で書かれていますが、冒頭、増4度や半音階など調性を感じさせない不気味な印象の音程が使用され、音の連打を多用してスピーディーで存分に鳴らされるピアノが、聴く者を圧倒します。やがて美しく繊細な表現に転じ高揚し、そして再びの激しい強奏、高音での繊細な静寂を経て、二長調での超快速の大団円に至ります。

ヨハネス・ブラームス (Johannes Brahms 1833-1897)

ヴァイオリンとピアノのためのソナタ 第3番 二短調 作品108

ブラームスは、オペラ以外の各ジャンルに充実した作品を残しています。1800年代、ロマン派の時代になると、創作は作曲者の自己表現そのものとなって個人の興味や適性に依じてなされるものとなり、以前のように注文に応じてどのような編成にでも作曲する、ということがなくなっていきました。各ジャンルの演奏技術が高度化し、知識の専門性が増していったこともその理由の一つと考えられます。そのような中、ブラームスのようにピアノ曲、歌曲、室内楽、交響曲、協奏曲と、歌劇を除けばほぼどのジャンルにも一級の作品を残しているというのは稀有なことで、このことはブラームスの汎用性のある作曲力と音楽性を現してもいます。

ヴァイオリンとピアノのためのソナタは3曲作っていますが、いずれも作曲家人生の後半になって取り組んだもので、第1番が1879年、46歳の折の初演、今回の第3番は1888年、55歳の折に自らピアノを弾いて初演しています。

古典のソナタの様式の上で、ロマン派ならではの情緒豊かな旋律線とダイナミックで劇的な表現が、楽章毎に性格や表情を変えて展開していきます。以下の4つの楽章で構成されています。

第1楽章 速く(Allegro) 二短調 4分の4拍子 ソナタ形式 約8分

第2楽章 遅く(Adagio) 二長調 8分の3拍子 3部形式 約5分

第3楽章 少し速く、感情を込めて(un poco presto e con sentimento)

嬰へ短調 4分の3拍子 3部形式 約3分

第4楽章 速く、激しく(Presto agitato) 二短調 8分の6拍子 ロンド・ソナタ形式 約6分

ブラームスの常として、悲劇も喜びも声高に訴えるというよりは、抑制して心の内に留めている風であり、それが成熟した近代人の有り様として、深い共感を呼び起こします。